鋼殻のレギオス　幻の天剣授受者

かぐにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鋼殻のレギオス　幻の天剣授受者

【Ｎコード】
Ｎ６５５６Ｌ

【作者名】
かぐにゃん

【あらすじ】
レイフォンが学園都市ツェルニへ来てから約一年。
突然現れた男はレイフォンにグレンダンへ戻れという。
そしてレイフォンの答えは・・・

～プロローグ～（前書き）

どうもかぐにゃんと申します、文才は無いですがどうか暖かい目で見てください。
よろしくお願いします！

～プロローグ～

～プロローグ～

学園都市ツェルニ　多くの学生が集まる都市の外縁部にて二人の男が立っていた。
一人は屈強な体をした男、年齢は二十代後半といったところだろう。
もう一人はレイフォンだ、しかし今は普段の緩んだ顔ではなく感情が抜け落ちたような眼で男を睨み付け、いつでもダイトを抜けるような体勢でいる。

「久しいな、レイフォン・・・」男が呟いた。
「天剣を剥奪されたそうじゃないか、まったく君はいつまで経っても甘いままだな」男は言う。

「・・・・・」しかしレイフォンは男を睨むだけで答えようとしない。

「君が黙るのも仕方がないか・・・ではもう一度言うよレイフォン」男は告げた。
「グレンダンへ戻って来てほしい」男は確かにそういった。

「・・・・僕は」レイフォンが口を開き。

一話　１３番目の天剣授受者（前書き）

めっちゃ遅くなってすいません、これからがんばって書いていくの生暖かく見守ってください。

一話　１３番目の天剣授受者

プロローグより5時間ほど前。

「はぁ！」

錬武館にて十七小隊は訓練をしていた。
レイフォンは錬金鋼を復元し素振りをしている。
ニーナ、シャーニット、フェリの三人は硬球の打ち合いをしていた。

「よし、今日はここまでにしておこう」

ニーナがそう言うと、小隊のメンバーはそれぞれ帰って行った。

「レイフォン、今日はバイトが休みだ、明日の練習試合もある、ゆっくり休め」

ニーナはそう言うと帰って行った。

「そろそろ帰るか」

レイフォンは錬金鋼を基礎状態へ戻し鞄へしまう。
今日の訓練は自由だった、明日は１１小隊との練習試合があり、そのための確認をしていた。

「ふぁぁ～」

練習の疲れと連日のバイトで相当疲れているようだ、練習中もそうだったが欠伸をよくしてしまう。

「帰って寝ようかな・・・・」

こうしてレイフォンは家に帰宅し眠りについた。

～数時間後外縁部にて～

「・・・・レイフォンの頸を感じるな」

屈強そうな体をした男がそう呟く。

「しかし、レイフォン以外の頸の反応は・・・・ま、学園都市だからな」

男はそういうと頸を高めるべく集中を始めた。

「レイフォン・・・・気づけよ？」

体内に溜めておいた頸を男は一気に解放した。

「！！！」

レイフォンはベットから飛び起きる。

「この頸量・・天剣授受者！」

反応は・・・外縁部！？

レイフォンは錬金鋼を持ち外縁部へ急ぐ。

「いた！」

ようやく外縁部に到着したレイフォンは錬金鋼を復元した。
簡易複合錬金鋼を抜いたレイフォンは無言で相手を威嚇する。
すると人影の男が口を開く。

「まったく、久しぶりの再開なのにいきなり錬金鋼を抜くかい？」

男はこちらに近づいてくる。

「顔を忘れられたのなら・・・ショックだな？」

近づいてくる男にレイフォンは見覚えがあった。

「ま・・・さか・・！」

レイフォンは思い出し、名前を口にする。

「まさか・・・・ガヴェットさん・・・？」

「その通りだよ、レイフォン、覚えていてくれて嬉しいな」

男、カヴェットは本当に嬉しそうに笑う。

「何で・・・何でガヴェットさんがここに・・・！」
「女王の命令でね、君を連れ戻しにきた」
「女王が？」

女王とはアルシェイラのことだろう、しかし自分はそのアルシェイラに追放されたのだ。

「なんで・・・今更・・・！！」
「女王は天剣授受者を必要としている」
天剣授受者、ここへ来る前のレイフォンの称号。
グレンダンでは最強の武芸者１２人に与えられる称号。
しかし、自分は金のため、孤児院の皆のために賭け試合をした。
そして天剣を剥奪され、都市外へ追放されツェルニに来たのだ。
「レイフォン、来てくれるな？」
「・・・・・・」
レイフォンは考える、正直グレンダンへ帰ることが出来るのは嬉しい、だが。
「僕は・・・・帰らない」
「レイフォン？」
「僕は帰らないと言ったんです、カヴェットさん」
「・・・そうか・・・なら」
ガヴェットは説得を諦めたのか目を閉じ。
「なら、こっちにも考えがある」
そう言うとガヴェットは頸を開放し都市に向かって放つ。
外力系衝頸　紅蓮斬
ガヴェットは錬金鋼を解放すると同時に頸を開放したのだ。
「なっ！」

狙いはツェルニ、ガヴェットが放った衝頸は都市の中央に命中した。

「この都市を滅ぼせば・・・考えは変わるだろう？」

そういってもう一度衝頸を放つガヴェット。

しかし、今度はレイフォンが衝頸を飛ばし相殺した。

「そんなことはさせない！先輩や皆は僕が守る！」

「そんな錬金鋼でどう勝つのだ？」

確かに、相手は天剣授受者になるはずだった男、勝つのは容易なことではない、だが。

「絶対に守るんだ！もう二度と僕は失いたくない！」

錬金鋼に制限があるのはあっちも同じだ。

かなり苦しい戦いになるが勝機がないわけじゃない。

「ふっ、じゃぁ相手になってやろうレイフォン」

こうしてガヴェットとレイフォンの死闘が始まった。

一話　１３番目の天剣授受者（後書き）

遅くなってすみません、ネタが思いつかなくて放置してしまっていました。
これからはなるべくがんばるので見て行ってください！

二話　廃貴族（前書き）

天剣授受者になるはずだった男ガヴェット。

彼とレイフォンの関係は！

そしてレイフォンの運命は！？

二話　廃貴族

「なんだ！」

ニーナは寝巻き姿のまま女子寮を飛び出る。

「さっきの巨大な剄は・・・！」

ニーナは先ほど強大な剄を感じ、その直後ニーナが住む女子寮の隣から爆音がしたのだ。
考えたくないがツェルニでこれほどの剄量をもつ人物をニーナは一人しか知らない。
そんなことを考えていると。

「隊長！」

念威端子から知っている人物の声がした。

「フェリか！、今どうなっているんだ！」
「今レイフォンが外縁部にて交戦中です！」

フェリもこの巨大な頸を感じ、その持ち主を探索し始めたのだろう。

「現在兄が小隊を召集してレイフォンの援護に向かわせるそうです！隊長も早く準備を！」
「分かった！」

幸い隣の建物の火災は収まりそうで怪我人もいないようだ。
それを確認するとニーナは準備のため大急ぎで寮へと戻っていった。

「はぁぁぁ！！」

レイフォンは全身に剄を纏わせ剣を振るう。

「ふん！」

男はそれを刀でいなし、神速の刀を振るう。
状況はレイフォンがやや不利だった。

こちらの武器はいつも使っている簡易複合錬金鋼。
相手は刀の鋼鉄錬金鋼である。
お互いに剄量に制限があるため衝頸は使わず内力系活頸の肉体強化による接近戦をしている。
これはお互いの技量の差が勝敗をきっする。
レイフォンの技量は一級品だが目の前の男は更にその上を行く技量の持ち主。
そのためレイフォンは徐々に押されつつある。

「くっ！」

やっぱり強い、流石は本当は天剣授受者になるはずだった男。

「でもっ！」

負けられない、今都市にはたくさんの仲間がいる、ここは。

「死んでも守りきる！！」

レイフォンはそう言い放つと、青石錬金鋼を抜き鋼糸を出す。

「ほぉ」

ガヴェットは感心したように声を上げると。

「うぉぉぉ！！！」

レイフォンが叫び鋼糸と斬撃を織り交ぜた攻撃をしかける。

「リンテンスさんに教えてもらったと聞いていたけど・・・なかなか使いこなせてるじゃないか」

そう言いながらもガヴェットは器用に刀で鋼糸と斬撃を防ぐ。

「とは言えこのままじゃ埒があかないなぁ」

ガヴェットはそう言うと、レイフォンへ衝剄を飛ばし距離を置く。

「はぁ、はぁ・・！」

レイフォンはガヴェットが距離を置くと追撃はせずに警戒を強めた。

「弱くなってなくて嬉しいよ、弱くなっていたらどうしようと心配していたんだがね」

ガヴェットはそう言いつつ錬金鋼を基礎状態へと戻す。

「・・・・・」

それをレイフォンは無言で見つめる。

「これでは君を倒して都市を破壊できない、だからねレイフォン」

ガヴェットはそう言うと右手で顔を隠し。

「切り札を使わせてもらうよ」

右手を離した顔には・・・。

「なっ！廃貴族！？」

獣を模した仮面があり、どこからともなく一振りの刀を復元した。

「知っているかいレイフォン？電子精霊が身を削って生み出した錬金鋼は天剣にも匹敵する力を持つんだ」

その手に握られているのは刀、それも長尺の。

「これで剄の最大出力の制限はない、勝てるかい？」

「・・・・・」

元々天剣授受者と同等の力を持つ武芸者に廃貴族、それに加えて天剣に匹敵する錬金鋼。

恐らくレイフォンが今まで戦ってきたどんな相手より強いであろう。

しかし。

「倒す、たとへそれがどんなに無謀なことでも僕は・・・」

もう一度強く錬金鋼を握りなおしガヴェットに向かって言う。

「この都市を守る！！」

レイフォンの手にはハーレイが持てる技術を全て使って作ってくれた錬金鋼がある。

自分の仲間、居場所、全てを守るために今の自分はここにいる。

そう信じてレイフォンは過去の師匠へ向かう、それがどんなに無謀なことでも。

「はぁぁぁ！！」

持てる剄を全てぶつけるべくレイフォンはガヴェットへ向かう。

「馬鹿者め・・・」

そう言ったガヴェットは最大出力の剄でレイフォンを迎え撃つ。

「てりゃぁぁぁ！！！」

次の瞬間には爆発が起こり、レイフォンの意識は飛んでいた。

二話　廃貴族（後書き）

今まで剄と書かずに頸と書いていましたね、ミスがあったら教えてください。

三話　選択（前書き）

突如として現れたレイフォンのかつての師ガヴェット。
都市を破壊しようとするガヴェットを止めるべく戦うことを選択したレイフォン。
しかし廃貴族を使った状態のガヴェットに圧倒され敗れてしまう。
レイフォンの運命は！

三話　選択

ガヴェット・エルトリア。
自分と同じグレンダンの孤児。
お互いに孤児たちを助けるため武芸をがんばってきた友であり師でもあった男。
彼はレイフォンよりも優れた剄と剣の技量の持ち主だった。
だから、本来なら自分ではなく彼が天剣授受者になるはずだった。

あの日、あの事件が起きるまでは。

「・・・・・・」

ガヴェットはボロボロになったかつての自分の弟子の姿を見る。

「・・・・最後に気を抜くとは・・・俺も、お前に甘いなんて言えないな」

苦笑しながら喋るガヴェットの頬には浅い切り傷があった。
最後の一撃の際レイフォンが鋼糸を使いつけたものだ。
ガヴェットはレイフォンを殺さぬように最後の最後でミスをした。
その結果が自分の頬に現れている。

「さ、じゃあ回収させてもらうからな」

ガヴェットは「よっと」と言いながらレイフォンを担ごうとしたその時。

「っ！」

ガヴェットに向かって大量の衝剄が襲ってきたのだ。
ガヴェットは全身に剄を纏わせ衝剄を防ぐ。

「げっ！あれ防ぐのかよ！」

そう言ったのは長い金髪を結ったさわやかな青年シャーニットだ。

「この程度！」

いくら数がいようとも所詮は学生武芸者の集まり、天剣クラスの武芸者にかなうはずもない。

「・・・レイフォンには悪いがここで殲滅させてもらおう」

そう言うとガヴェットは剄を高めはじめる。
ガヴェットが反撃してくるのを感じた武芸者たちは。

「やべっ！」

逃げようとするが既に遅い。

「ふん！」

ガヴェットは復元した鋼鉄錬金鋼を地面に突き刺し。

外力系衝剄　崩撃走

地面に刺さった錬金鋼を通し地面へ衝剄を送る。
これにより大規模な地割れを起こすことが出来るのだ。

「こ、これは！都市が・・・！揺れているのか！」

武芸長のヴァンゼは状況をいち早く把握し全員に撤退命令を出す。
ヴァンゼが出した撤退命令を受け撤退を始める学生武芸者達。

その様子を見たガヴェットは。

「逃がさん」

崩撃走を変化させ都市部と外縁部との間に厚い壁を作る。

「なっ！」

こんなでたらめな技をはじめて見たのか、武芸者たちは驚愕していた。

「会長！」

そんな光景を時計塔から見ていたカリアンに最悪のニュースが届く。

「何事だ！」
「さ、さっきの衝撃で！機関部が損傷！電子精霊が！」

機関部から話をしてくる生徒はパニックになっているのか上手く喋れていない。

「電子精霊がどうしたのだ！」

「このままでは！電子精霊は機能を停止し！ツェルニは活動を停止します！」

「なん・・だと・・・！」

電子精霊の死亡、それは都市の死を意味する。
汚染獣に都市を破壊されるのではなく、一人、たった一人の武芸者によって都市が破壊される。
機関部は既に深刻なダメージを受けており、この衝撃を止めねば都市は死ぬ。

「しかし・・・！」

レイフォンが敗れた今、あの武芸者を止める実力を持つものはいない。

「仕方がない・・・！」

カリアンは覚悟を決め都市へある命令を出す。

「現時刻をもって学園都市ツェルニを破棄！全ての生徒は迅速に都市外へ非難してください！」

都市を捨てる、それはカリアンにとってこの上ない屈辱だ。

「いや、私よりも・・・！」

恐らく武芸科の生徒の方が屈辱だろう、都市を守護する武芸者が都市を守りきれなかった。

これは一般人である自分よりもよっぽどきついことだろう。

「皆すまない・・・・！」

「くそったれがぁ！！」

小隊の面々はほぼ壊滅していた。

圧倒的、そう表現するしかない、こちらの攻撃はまったく歯が立たず、あちらの攻撃は一撃は一撃が都市へ深刻なダメージを負わせている。

「先ほど会長が非難警告を出した！俺たちも逃げよう！」

そんな声が上がり始める。

「この痴れ者が！」

そんな中ニーナは弱音を吐いている武芸者達に渇を入れていた。

「我らが都市を守らずしてだれが守るのだ！」

ニーナは叫びガヴェットに最大出力で衝剄を放つ。

「無駄だな」

その衝剄はガヴェットの纏っている剄に触れた瞬間、消滅した。

「うぉぉぉ！！」

それでもニーナは諦めず衝剄を放ち続ける。

「・・・意気込みは良いが」

ガヴェットがそう言った直後ニーナがいた地面が形を変え襲ってきた。

「がっ！」

ニーナはそれを防ぎきることが出来ず地面にたたきつけられる。

「はぁ、はぁ」

しかしニーナは立ち上がりこちらに突っ込んでくる。

「金剛剄・・・・レイフォンに教えてもらったか？」

今度は距離を詰め、ニーナを殴り飛ばしながら言う。

「それに廃貴族・・・なかなかだが」

ニーナを追撃すべく左手から衝剄をニーナに向けて放つ。

「天剣には程遠い」

衝剄は見事にニーナへ命中し大爆発が起きる。

「ふむ、武芸者はあらかた片付けたな、あとは」

廃貴族を解放し剄を高めるガヴェット。

「や・・・・めろ・・！」

ニーナは朦朧とした意識の中ガヴェットを止めようとする。
恐らくこの一撃は都市を完全に破壊するだろう。
ニーナはもう一度動くために内力系活剄で動かそうとするが、ダメージがひどく指一本動かせない

（ああ、都市を守れずして私は死ぬのか？）

目の前の武芸者は強い、それも圧倒的に、さきほども廃貴族を使った一撃があっさりと破られていた。

（力を手に入れたと思っていたのに・・・・）

何も守れていない、それでは意味がない。

（せめて、レイフォンなら守れるだろうか？）

廃貴族を使っても目の前の男には傷一つつけることは敵わないだろう、だがレイフォンならば可能性はある。

「これで終わりだ」

ガヴェットが刀を振り下ろそうとした瞬間。

レイフォンが立ち上がった。

「守らなくちゃ・・・！」

「ほぉ」

全身はボロボロだし、錬金鋼も折れている、左手も力なくうなだれているだけの満身創痍の状態。
だがレイフォンの目は死んではいなかった。

「まだ体が動くか・・・」

ガヴェットは溜めていた剄をとどめ、レイフォンの方を向く。

「僕は・・・都市を・・・守る！」

そう言いレイフォンはガヴェットへ衝剄を放つ。

「だからなんだ？今のお前に何が出来る！」

レイフォンの攻撃はガヴェットの剄によってはじかれ
その衝剄はガヴェットの剄によって弾かれガヴェットも衝剄を放つ。

「ぐぁ！」

今のレイフォンに避けることはできず、数十メートルほど飛ばされる。

「わかったか？今のお前じゃ俺に勝てない、天剣のないお前じゃな」

外力系衝剄　閃断

「レイフォン！」

ニーナの叫びと同時にレイフォンから鮮血が舞った。

「ふん、寸でのところでかわして致命傷は防いだか、だが流石に動けまい？」

致命傷を避けたとはいえ深手を負ったのには違いない、あれで死ぬとは思えないが放置しておけば失血死するだろう。

「じゃ、次はあんただ」

ガヴェットはニーナの方を向きながら言う。

三話　選択（後書き）

次は衝撃の展開があります。

四話　暴走（前書き）

ガヴェットの圧倒的な力の前に敗北したレイフォン。
そして力を求めるレイフォン。
レイフォンと都市の運命は！

四話　暴走

「終わりだ」

ガヴェットがそう言いニーナへ鋼錬金を突き刺そうとする。

「く・・・そっ！」

レイフォンはただそれを視ているしかなかった。

（せめて、せめて僕に天剣があれば・・・！）

もっと戦えたかもしれない。

（もっと僕に力があれば・・・！）

都市を守れたかもしれない、しかし今のレイフォンは深手を負っている上に剄も尽きかけている。

（力が欲しい・・・もっと強力な力が・・・！）

レイフォンは心の底からそう思う、そして。

（力が欲しいか？）

誰かがそんなことを言う。

（誰だ・・？）

（私の名はメルニクス、力が欲しいか？）

そういったのは人間ではなく黄金に輝いた雄山羊だった。

（欲しい、仲間を、都市を守れるだけの力が！）

レイフォンがそう言うと。雄山羊はこう言った。

（ならば与えよう、名も無き武芸者よ）

そう言い残し雄山羊はレイフォンの体の中へ入っていった。

「恨むなら恨んでくれていい、俺は自分の仕事を優先させる」

ガヴェットはそう言って錬金鋼を構える。

「くっ！」

ニーナは体を動かそうとするが、ダメージを受けすぎたのか全く動かない。

ニーナがこのまま死を覚悟した時。

「！？」

ガヴェットは何かに気づいたように後ろを向く、その先には。

「レイ・・フォン・・！」

ニーナは確かに視た。

レイフォンは重傷を負いながらも立ち上がった。
「まだそんな力が残っていたのか」
ガヴェットは舌打ちをし、レイフォンの方を向く。
だが、そのレイフォンは普段とは様子が全く違った。
「レイ・・・フォ・・ン？」
ニーナはレイフォンを呼ぶが返事が無い。
そして。
「あ”あ”あ”あ”！！！」
レイフォンが咆え、爆発的に剄量が上がる、そして。
「なっ！廃貴族だと！？」
驚くガヴェット。
そしてレイフォンの顔には獣の仮面があった。
その手には一振りの刀が握られており、全力のレイフォンの剄を受け止めていた。
「廃貴族の錬金鋼・・・やっかいだな！」
これでガヴェットと条件は同じ、ガヴェットはレイフォンへ一直線に向かっていく。
「はぁぁ！！」

ガヴェットはあえて正面から切りかかった。
当然のようにレイフォンに刀を弾かれる。
次の瞬間、既にガヴェットはレイフォンの右側に居た。

「ふっ、この程度か！」

そして下段からの斬撃、このタイミングなら外すことは無い、そして避けられることも。
この一撃でレイフォンは間違いなく戦闘不能になるだろう、これでガヴェットの任務は終了。

（終わりか、案外あっけないものだな）

「ア”ア”ア”！！！」

その瞬間レイフォンの姿が消失した。

「！？」

ガヴェットは驚愕する、ガヴェットの一撃は空を切り、レイフォンは消えた。

「どこだ！」

ガヴェットはレイフォンの気配を探ろうとするがまったくわからない。

（これは・・・殺戮か！）

しかし、先ほどの行動から殺戮を使って逃げれる場所はただひとつ。

「上か！！」

ガヴェットは上を見る、そこには既に地上近くまで迫ったレイフォンの姿があった。

「ア”ア”！！」

レイフォンはガヴェットが自分を見つけたことに気づくと剄を一気に開放した。

「凄まじい剄だな・・・！だが！」

レイフォンに対抗してガヴェットも剄を開放する。

「はぁぁぁぁ！！！」

「ア””ア”ア”！！！」

巨大な二つの剄はぶつかった。

その光の中から二人は出た、そしてすぐさま接近し、斬り合いをはじめる。

「その力・・！破壊衝動に飲み込まれているな」

そう、レイフォンは今理性を失っている、そして廃貴族特有の破壊衝動により動くもの全てを破壊しようとする。

その力は強大で一撃一撃が都市を揺るがすほどだ。

「くっ！まさか、お前に廃貴族が取り憑くとはな！」

互いに刀を、弾き、流し、受け、反撃をする中でガヴェットは呟く。

「やっぱりレイフォン、お前は強いよ、元師匠としては嬉しいね！！」

ガヴェットがレイフォンの刀を弾いた、その瞬間レイフォンに僅かな隙が生まれた。

「そこ！」

ガヴェットは渾身の威力を拳に込め、レイフォンを殴り飛ばす。

「ア”ガ！」

その衝撃でレイフォンは都市の付近まで飛ばされるが、すぐに体勢を立て直す。

「ア”ア”ア”！！」

レイフォンはその場で剄を高め、衝剄を放とうとする。

「不味い！」

ガヴェットは慌てて防御の準備をする。

「ア”ア”！」

外力系衝剄　激流葬

この剄技は大量の衝剄を拡散的に放出し、全てを飲み込む激流とする技。
その激流はあっさりとガヴェットを飲み込み、さらに外延部を飲み込んでいく。
その破壊力は恐ろしく、外延部の３割ほどが消滅した。

「ぐっ！」

ガヴェットも防いだわ言え、さすがにノーダメージとはいかなかったようだ。

「あ”あ”！」

そしてガヴェットが生存していることを確認したレイフォンは、もう一度放つために剄を高める。

「ちっ！」

それにを防ぐためにガヴェットも衝剄を放つため剄を高める。

（次にあの技を相殺した後に、一気にけりをつける！）

ガヴェットが考えをまとめ、レイフォン技を放とうとした瞬間！

「止めろレイフォン！正気に戻れ！」

ニーナがそう叫んだ、そして。

「ア”ア”！」

レイフォンはニーナに向かって衝剄を放った。

四話　暴走（後書き）

レイフォンに廃貴族とかやってみたかったんです。

五話　決着（前書き）

都市を守るため廃貴族に憑かれたレイフォン、そしてレイフォンは破壊衝動に飲み込まれ、敵味方関係なく襲い掛かってしまう、そんな中レイフォンを止め様としたニーナに向けてレイフォンの攻撃が迫る。

五話　決着

「なっ！」

ニーナは自分の目を疑った。
なんとレイフォンが自分に向かって容赦なく攻撃を仕掛けたのだ。
しかし、その攻撃はニーナに当たる寸前、ガヴェットの衝剄によって相殺された。

「逃げろ！死にたいのか！」

ガヴェットはニーナに叱咤した。

「レイフォン・・・」

しかし、ニーナはレイフォンに攻撃されたことがよほど衝撃的だったのか話を聞いていない。

「ちぃ！目の前のをどうにかするしかないってか！」

ガヴェットはレイフォンに向けて突撃する。

「ア”ア”ア”！！」

その姿を確認したレイフォンは衝剄による攻撃を止め、接近戦をする。
そして両者が切りあうさなか、ガヴェットは言った。

「おい！今こいつは俺が抑えている！お前は早く安全なところへ逃げろ！いいな？」

苦しそうにガヴェットは言う、当然だ、もはや目の前にいるレイフォンは暴走した列車のようなものだ。

そんなものを相手に余所見をしている暇などあるはずがない。

（ちっ！しかし、なんでいきなりレイフォンに廃貴族が取り憑いたんだ？）

ガヴェットは考える。

この都市は廃貴族ではない、ならば何処の電子精霊が取り憑いた？

今この場には自分とニーナの二人しか廃貴族を持っているもにはいない。

（まさか・・・あの女の廃貴族が・・・？）

自分の廃貴族は居なくなっていない、だとすれば可能性としてはニーナの廃貴族がレイフォンに憑いたとしか考えられない。

そしてそれを確認するために、ガヴェットはレイフォンの仮面を見る、それは。

（やはりか・・・！）

レイフォンがつけている仮面はニーナと同じ、つまり。

（あの女の廃貴族か！まったく厄介なことをしてくれるな！）

レイフォンの刀をはじきながら思う。

ニーナの方を見ると既に安全なところまで逃げていた。

「よし！」

ガヴェットは一旦レイフォンとの距離を取ると、一気に剄の密度を上昇させた。

「これで遠慮なくいける！！」

全力となったガヴェットは瞬間的に高速移動を行い、レイフォンの背後に回った。

「ア”！！」

レイフォンはすぐにそれに気づき上空へジャンプする。

「逃がすか！」

それを追いガヴェットも跳躍する。

「はぁぁぁ！！」

ガヴェットは空中で剄技を放つ。

外力系衝剄　紫電閃

「ア”ア”ア”ア”！！！」

それに対抗してレイフォンも剄技を放った。

サイハーデン流　焔切り

両者の居合いは空中で激突し、激しい突風を発生させる。

「うぉぉぉ！！」

「ア”ア”！」

しかし、二人の戦いは決着がつかず、さらに空中で数撃打ち合う。

「くそっ！思いのほか手強いな！」

着地と同時に、ガヴェットはそう呟き、次の瞬間消えていた。

両者共に一進一退、もはや姿は確認できず、時折発生する火花と剄のみが彼らの位置を知る、唯一の方法となっていた。

「すげぇ・・・」

それを視ていたツェルニの武芸者達はそう言うことしか出来なかった。

そして。

「はぁ！！」

「ア”ア”！」

再び二人がぶつかり。

「ぐぁ！」

「ぐぉ！」

二人を中心に大爆発が発生し、二人とも吹き飛ばされる。

「はぁ！はぁ！」

「ア”・・ア”」

両者は満身創痍だ、レイフォンは元々だが、ここにきてガヴェットのダメージも相当大きいようだ。

「はぁ！はぁ！そろそろ・・決着だ！」

そう叫んだガヴェットは一気に剄を練り上げる。

「ア”ア”ア”！！」

対するレイフォンもガヴェットが次で決着をつけようとしていることを察知し、莫大な剄を練り上げる。

「ふっ、まぁ、楽しかったよ・・レイフォン！！！」

そしてガヴェットは自らの持てる、最大の技を放つ。

外力系衝剄　絶影

これは大量の剄を錬金鋼に収束させ、一瞬の内にそれを開放し、すべてを破壊する居合い。

「ア”ア”ア”ア！！！」

外力系衝剄　轟剣

レイフォンは錬金鋼に全ての剄を流し込み、巨大な剄の刃を作り出す。

そしてそれを目の前の敵に向けて振り下ろす。

互いの最大の剄技がぶつかり合い。

ツェルニに巨大な光の柱があがった。

六話　夜明け（前書き）

ニーナの廃貴族を貰い、力を取り戻したレイフォンは再びかつての師であるガヴェットと刃を交えた。
激闘の末、両者の戦いは相打ちという結果で終結した。
そしてガヴェットが天剣にならなかった真相は――――

六話　夜明け

小さい頃の記憶はない、あるのはただの闇、どこを見て真っ暗、人なんて居ない、生物すら居ない。
そんな孤独な空間に一人で居た、怖かった、暗くて寒くて寂しかった、大声で人を呼んでみたし大声で泣き叫んだ、でもそのうち理解した、皆死んだんだと。
良く考えれば子供でも分かっただろう、そこら中で壊れた建物、真っ赤な地面、肉が腐ったような臭いと血の臭い。

「グゥウゥゥ・・・・！！」

一匹の化け物、固そうな鱗に包まれて、口からは血と肉片を溢しながら、それは僕の方へ寄ってきた。

僕は逃げた、泣いて逃げた、恐怖で頭がいっぱいだった、でもすぐに追いつかれた。

僕は転んでしまって壁にぶつかった、痛い、怖い、助けて。

そう思うけど誰も助けてくれない、だって皆目の前にいる化け物に食べられちゃったんだから。

きっと僕も食べられる、そいつは大きく口を開けて、大きな牙を僕に突き立ててきた。

僕も食べられた、そう思いながら僕は目を閉じた。

「ガウッ！！」

でも僕は食べられなかった、最後に耳にしたのはそいつの苦しむような声と肉が砕けるような音だった。

「大丈夫？」

初めて声を聞いた、その精霊は眩しくて、光っていたんだ。

「僕は都市を守れなかったんだ、だから君に力を託す、君ならきっと都市を守れるよ」

そう言って精霊は消えたんだ、一本の刀を残して。
でも精霊の感じは僕の中にあった、たぶん精霊は僕の中に入ったんだと思う。
もう僕は一人じゃない、だっていつも精霊が一緒に居るから。

こうして僕は死んだ都市で幼少の頃を過ごし、グレンダンへ渡った。

「・・・・・あ・・」

目が覚めて一番初めに視界に入った物は銀髪の少女の顔だった。

「フォンフォン！目が覚めたんですか！」

その少女は泣いていた、そして僕はその少女の名前を呼んだ。

「フェ・・・リ・・」

まだ上手く舌が回らず上手くしゃべれなかった。

頭も全然働いていない、ここが病室だと理解するのにも時間がかかった。

「そう・・・か、僕・・・は・・ガ・・ヴェットさんと」

戦っていた、そう思い出す。

「戦って・・！？」

思い出した、確か廃貴族の力を借りて！

「フェリ！先輩は！ガヴェットさんは！」

レイフォンは寝ている身体を無理に起こした。

「落ち着いてくださいフォンフォン！いきなり動くと傷口が・・・！」

「そんな・・！がぁ！」

悠長な！と言おうとしたレイフォンに激痛が走った。

「そんなじゃありません！あなたの傷は死んでもおかしくなかった傷です！今無茶に動くと傷口が開きます！」

フェリに大声で説教をされてしまい、起こしていた上半身を下ろし、再び横になる。

「とにかく、今は絶対安静です、あなたは3日も寝ていたんですからね」

「・・・3日も・・！けど先輩は・・！」

「隊長なら無事です、大怪我だそうですが貴方ほどじゃないと思います」
「よかった・・・」
ほっと胸を下ろすレイフォン、あの場で爆発に一番近かったのはニーナだ、ニーナが死んでいないということはそれよりも遠くにいた武芸者達にもいないであろうと考えるレイフォン。
「それと今回の事件での死者はいません、恐らくあの武芸者も気をつけていたのでしょうね、重傷者こそ多いですが障害が残るような大怪我はしていないようです」
フェリが淡々と説明してくれる。
「うん、あの人は昔から人殺しは嫌いな人だったからね、それでその武芸者は何処に居るの？」
レイフォンはフェリにたずねた。
「現在、生徒会室で兄と対談しています、あの武芸者も重傷でしたけど、殆ど完治して歩くことなら問題ないようです」
これも丁寧に説明してくれた。
「そうかぁ、やっぱりあの人のほうが早く治ったか・・・」
武芸者は自分の剄で身体を直すことが出来る、剄量の多いレイフォンはその点では自信があった。
だが、ガヴェットは自分と同等かそれ以上の剄量を持っていたのだ。

「それに戦う前だってあの人は殆ど無傷だったから、僕よりも直りが早いのは当然か・・」

最後の一撃もガヴェットが本気を出していれば自分は死んでいたはずだ、だが自分が死んでいないのは手を抜かれていたからである。

「それより、フォンフォンはあの武芸者と知り合いなんですか？」

フェリが興味深そうに聞いて来たので簡単に説明をした。

「あの人はガヴェットさんって言って僕の二番目の師匠だった人だったんだ」

「二番目？では最初は誰なんですか？」

フェリが考えていたので教えてあげた。

「あぁ、最初は養父（父さん）だよ、それで三番目がリンテンスさん」

今思うと養父の教え方がどれほど分かりやすかったか分かる。

ガヴェットさんは説明が分かりづらいし、リンテンスさんに限っては説明すらしてくれなかった。

「まぁ、それで教えてもらってたんだけど、本当は僕じゃなくてあの人が天剣授受者になるはずだったんだ」

「天剣に？」

フェリが驚いていた。

「うん、あの人は僕よりも強かったからね、だから準決勝で僕らは戦うことになったんだ」
「でもフォンフォンが勝ったから、天剣になったんじゃないんですか？」
「いや、僕はあの人と戦ってなんていないよ、あの人はグレンダンから出て行ったんだよ、その準決勝の前日にね」
レイフォンは思い出した、あの日のことを。

六話　夜明け（後書き）

遅い上に短くて本当にすいません、変わりに明日もう一度書くので見てください、
あとあんまりネタがないので感想などに書いてくれると助かります、もしそのようなことがあればそちらを参考にして書いていこうと思うので、書いてみてください。

七話　思い出話（前編）（前書き）

激闘の末相打ちとなったレイフォンは3日後病院で目を覚ました。
そしてフェリの質問から昔のことを思い出す。
レイフォンの隠された過去、そしてガヴェットとの間に何があったのか。

七話　思い出話（前編）

僕らが始めて出会ったのは血生臭い戦場だった。
その頃僕は８歳で、彼は１３歳だった。

「その日僕はいつも通り戦場に出て汚染獣を片っ端から片付けていました、その頃の僕にとって戦場とはただの金を稼ぐための場所でしかなかった、だから早く片付けて報酬を貰って帰ろうとしていたんです、その日都市を襲ってきたのは雄性体が2体でした、僕は高速で近づいて一撃で一体目の雄性体を殺しました、そしてもう一体は別の少年によって倒されていたんです」

「ではその方が？」
「そう、ガヴェットさんだった、あの人も僕と同じで一撃で雄性体を倒していた、当然僕は驚きもしなかった、雄性体ぐらいなら一撃で倒せる武芸者なんてグレンダンにはたくさん居たから」

そう、グレンダンはこの世界最強と呼ばれる都市だ、そこには歴戦の武芸者達が多く居るし、レイフォンと同等かそれ以上の実力を持つ武芸者、十二人の天剣授受者と最強の王女アルシェイラがいた、他の都市から見ればグレンダンは汚染獣との遭遇率が高く危険だと思われているが、グレンダンの民からはグレンダンよりも安全な都市はないというのが共通認識になっていた、そんな都市で雄性体を一撃で倒したところで何の意味も無い、そんなことを出来る武芸者は他にも居るのだから。

だが、強い武芸者は都市を守るため意外に様々な目的があって戦っているんだ、ある人は僕のように金のために、ある人は自らの強さを証明するために戦っていた。

「でも彼は僕や他の強い武芸者とは違ったんだ、僕が金のために戦っているというのに、彼は本当に都市を守りたくて戦っていたんだから、彼はが僕よりも強いのは当たり前なんだと思った」

確か初めて話をしたのはもう少し後だっただろうか？そう思いもう一度記憶を呼び覚ます。

あの日僕は彼と初めて話した。

「よぉ、お前いつも戦場に居るよな？まだ小さいのに」

最初は失礼な奴だと思った、初対面でいきなり人のことを小さいと言ったりしていたし、なにより彼が多く自分よりも汚染獣を倒していたからだ。

報奨金は自分の活躍によって増えたりする、普段ならレイフォンは殆どの汚染獣を倒し多くの金を稼いでいた、だが彼が戦場に姿を現すようになってからは彼が半分ほどの汚染獣を自分が倒す前に倒してしまい報奨金による収入が減っていた。

だから気に喰わなかった、別に金を必要としていないのに何故多くの汚染獣を倒そうとするのか、何故理由もなく自らを危険にさらすのか、レイフォンにはそれが理解できなかった、いっそ戦場の流れ弾を装って殺そうか？そう思ったこともあった、だがあの日レイフォンがした質問の回答でレイフォンが彼に持っていた恨みは何処かへ消えた。

「なぁ、お前、なんで毎回戦場に来るんだ・・？」

ある日そのことが気になっていたレイフォンは戦いの後ガヴェットに話しかけた。

「へ？」

その質問の意味を理解できなかったのか、ガヴェットは呆気にとられていた。

「だから、何で毎回危険な戦場に来るんだよ、何か理由でもあるのか？ほら金とか」

「あ～、なんて言うかな、正直に言えば個人としての理由はこの都市を守りんだ」

・・・・・は？とレイフォンは心の中で一瞬思考が止まった。

「なんでだよ！お前ががんばらなくてもこの都市は安全だ！お前以外にもたくさん強い武芸者が居るんだぞ！なんでそんなことのためになんでお前ががんばる必要があるんだ！」

ついレイフォンは心の中で思っていたことを口にしてしまった。

その事を聞いてガヴェットは。

「・・・そうかもしれない」

一瞬暗い表情をしそう言った。

「なら――」

お前がそこまでがんばる必要が無い、とレイフォンは言おうとした時、ガヴェットが再び口を開きこう言った。

「それでも俺は戦うのをやめるつもりはない、どんなことをしたってそれが俺の選んだ道だからな」

その言葉を聞いた瞬間、レイフォンはガヴェットに向かって衝剄を放った。

その衝剄は見事にガヴェットに直撃し爆発した。

「・・・・何のつもりだ？」

だが、ガヴェットは瞬時に錬金鋼を復元しレイフォンの衝剄を防いでいた。

ガヴェットは鋭い眼光でレイフォンをにらみつけた。

「いま理解したよ、君は自分よりも都市を守ろうとしている、自分を犠牲にする必要も無いのに・・」

そう言いながらレイフォンは錬金鋼を復元し。

「なら、ここで武芸者を辞めてください、君が無駄な命を散らす必要はないのだから」

もう一度ガヴェットに向けて衝剄を放った。

「確かに、この衝動は自分でもおかしいと思っているよ」

その衝剄は同じようにガヴェットが撃ち出した衝剄によって相殺された。

「お前が俺をどう思おうが勝手だ、俺は、俺が選んだ道を進むだけ

なんだからな！！」
ガヴェットは叫びと同時に消失した。
「そう・・・ですか」
レイフォンは悲しそうに呟き、消失したガヴェットを追う。
「お前見た感じ俺と同じくらい強そうだな！本気で行くぞ！」
「いいですよ、かかってきてください！」
巨大な剄を纏わせた二人が激突し、大爆発が起きた。
二人の激闘はレイフォンの敗北という形で決着した。
「はぁ・・はぁ・・お前・・やるじゃないか・・！」
荒い息を吐き刀で身体を支えながらガヴェットが言う。
「君も・・つよ・・いね・・」
レイフォンはかすれた声でその言葉を返した、体中に切り傷や擦り傷があるが命に関わるような怪我はないようだ。
「はぁ・・・はぁ・・なぁ、お前・・・俺の弟子にならないか・・・」
限界が着たのか膝を着き、そのまま地面に倒れこみながらガヴェットはそんなことを言った。
「なんで・・そんなことを言うんだ？」

「俺ならお前をもっと強くさせてやれるよ、お前は強いよ、その歳でその剄量と技量があるならお前は必ず俺を超えるだろう！」

嬉しそうに語るガヴェット。

「だからさ、俺の弟子・・いや、ライバルになってくれ！」

とガヴェットは起き上がりレイフォンを見ながら言った。

ガヴェットの顔にはからかっているような感じはせず、心からそう思っているように見える。

そんなガヴェットの願いを聞かないわけにもいかず。

「いいよ、今日から僕は君のライバルだ、でも今でも僕の気持ちは変わらない、君がやることは間違っていると思っている・・それでもいいのかい？」

「いいぜ、俺もお前には負けねぇ、俺を止めたけりゃ強くなれよな！所でお前名前は？」

「レイフォン、レイフォン＝アルセイフ、君は？」

「俺はガヴェット、ガヴェット＝フォルテシアだ、これからよろしくな、レイフォン！」

「よろしく、ガヴェット」

こうして僕らはライバルとなった、それからは共に戦い、共に笑い、共にがんばってきたんだ。

そう、あの日までは・・・。

七話　思い出話（前編）（後書き）

また短くてすいません、次は出来るだけ早く書けるようにします。
今後の展開募集中です、どうか皆様の発想力を貸してください。

第八話　思い出話　後編（前書き）

６年前に出会った少年ガヴェット、彼と親友になったレイフォン。
だがレイフォンとガヴェットが天剣授受者の候補に選ばれてから少し後、彼とレイフォンの絆を引き裂く事件がおきる。
はたしてその事件の真相は？

第八話　思い出話　後編

グレンダンの朝は早い、天剣授受者の一人が毎朝決まった時間に鍛錬をするため毎朝決まった時間にグレンダンの民たちは起きることができる。

まぁ元々武芸者が多いこともあってグレンダンは早朝から活気があふれていた。
そしてグレンダンの端にある、とある孤児院もまた活気に満ち溢れていた。

「こら朝よおきなさい！！」

フライパンなどの道具を片手にそれぞれの部屋を回り起していく少女がいた。
その少女の名はリーリン、彼女はこの孤児院の洗濯や料理などの家事を一切切り盛りしていて歳のわりに性格もしっかりしていた。

「もぉ、夜遅くまで鍛錬するのは良いけど、早く起きなさい」

そう言ってリーリンはベットに寝そべっている少年の毛布を強引に剥ぎ取る。

「ぅぅ・・眠い・・・」
「はいはい、早く着替えてよねレイフォン」

そういわれたレイフォンは目をこすりながら。

「うん・・・・」

なんとその場で服を脱ぎだしたのだ。

「っ・・・！」

それを見たリーリンは顔を真っ赤にして。

「なんでここで着替えるのよ！！！」

絶叫しフライパンでレイフォンの頭を叩いた。

「いてっ！」

叩かれたところを抑えるレイフォン。

レイフォンはりーリンの方を見ようとしたがすでに部屋から出て行ってしまったようだ。

「？？」

未だに叩かれた理由が分からずにいるレイフォンはそのまま着替えを続けた。

着替えを済ませるとレイフォンは食堂に向かった。

扉を開け食堂に入るとすでに自分以外の孤児が全員集まっていた。

「おはようレイフォン兄ちゃん！」

「おはようトビー」

とりあえず皆とあいさつを交わす、そして。

「おはよう養父さん」

そう言った相手は椅子に座っていた。
レイフォンの養父であるデルクだ、今は第一線から身を引いたものの、鍛えられた肉体は未だに衰えない。
その奥を覗き込むとリーリンが料理を作っていた。
レイフォンは暫くその姿を見ていた、すると養父が突然。

「あぁ、そうだレイフォン、どうやらガヴェットの小僧が帰ってきたらしいぞ？」

と突然言い出したのだ。
レイフォンはその言葉を聞きしばらく動きを止めた。

「・・・・・」

しばしの沈黙の後。

「本当に！？」

レイフォンは叫び勢い良く外に飛び出した。
足に剄を収束させ一気に開放しその場で高く跳躍する。
レイフォンは空中に上がると都市中の剄を感じ取る、すると確かに感じなれた剄を感じることが出来た。

「やっぱり帰ってきたんだ！」

レイフォンは嬉しさで胸がはちきれそうだった。
実はガヴェットは2ヶ月程前からグレンダンの大使としてある都市

で活動をしていたのだ。
内容は難しくてあまり覚えてはいないが、ガヴェットが言うには世界のためになる、だそうだ。
そしてレイフォンがしばらく都市の上空を移動するとバスの停留所が見てきた。
レイフォンは活剄で視力を強化した。
その目が見たガヴェットは2ヶ月前と殆ど変っていなかった。
身体に巻いた布こそボロボロになっているものの彼の表情自体はいたって普通だった。
唯一つ、少しだけレイフォンはガヴェットの剄に異変を感じた。
だがその異変自体は一瞬で消えたのでレイフォンは気には留めなかった。
そう、思えばこれが初めて廃貴族を感じたことだとレイフォンは知る由も無かった。

「おかえりガヴェットさん！」

停留所に勢い良く着地したレイフォンはそのまま元気良くガヴェットに話しかけた。

「やぁレイフォン、久しぶりだね元気だったかい？」

彼は笑顔を浮かべながら応えた。

「実はね、ガヴェットさんがいなかった間に――――」

レイフォンはこの2ヶ月で溜まった話題をガヴェットに話そうとした時、衝撃が都市を襲った。
その揺れは通常の都震ではなかった、そうこの揺れは何度も経験した・・・。

「汚染獣・・・！」

レイフォンは持っていた錬金鋼を手に取ると復元した。

「ガヴェットさん、あなたも一緒に――」

行こう、とレイフォンが言おうとした時、ガヴェットの後ろに輝く獣の影が見えた気がした。

その影はライオンのような形ををしていた、影はすぐに消えたがガヴェットの顔が苦しそうに歪む。

その直後ガヴェットの剄が爆発した。

膨大な量の剄が行き場をなくし周囲に衝撃を撒き散らす。

「ぐぬぁぁぁッ・・・！！！」

ガヴェットは何かに耐えているようだったがやがて剄は収まり別人のような雰囲気を纏っていた。

「ガヴェット・・・さん？」

レイフォンは心配そうに聞いてみるがガヴェットはレイフォンを無視し。

「ッ・・！」

何かに反応してその場から飛び去った。

「まっ待って！」

レイフォンは慌ててガヴェットの後を追う。
しばらく移動して分かったことはガヴェットは外縁部に向かっているということだった。
どうやら汚染獣を倒すつもりでいるらしい。

（そんな・・戦闘衣も着ないで・・！）

レイフォンはスピードを上げガヴェットに並んだ。
そしてガヴェットの腕を掴みこういった。

「無茶です！せめて戦闘衣を着てから－－－」

だがレイフォンの言葉は続かなかった。

何故ならガヴェットがとんでもない力でレイフォンを振り払ったからだ。

「ぐっ・・・！」

レイフォンは凄まじい衝撃と共に地面に叩きつけられる。
レイフォンはガヴェットの方を見るが、ガヴェットはそんなことは気にも留めないで外縁部に向かっていった。

（ガヴェットさん・・・なんで・・・）

結局その日襲ってきた汚染獣は全てガヴェットが倒したようだ、レイフォンもすぐに駆けつけたがその時には全てが終わっていた。
今回襲ってきた汚染獣は雄性体二期が一体と幼生体が百体程度だった。
大量の汚染獣の死体の中央で立っていたガヴェットの雰囲気はいつ

ものものに変わっていた。

「レイ・・・フォン・・俺は一体・・・？」

一体何が起こったのかわからないようにレイフォンにたずねるガヴェット。

「ガヴェットさんこの汚染獣たちは全て貴方が倒したんです、覚えてないんですか？」

「・・・悪い、少し頭が混乱しているみたいでな良く覚えていないんだ・・・」

ガヴェットは思い出そうとがんばっていたがどうやら本当に思い出せないらしい。

「最後に覚えているのは・・・都震が来た時まで・・・だ」

「あの時・・・」

レイフォンはその言葉を聞き影が現れた時のことを思い出した。

（やっぱりあの影に関係あるのかな？）

と途中まで考えていたのだが今のガヴェットは特におかしくもないので口にはしないで置く。

「きっと長旅で疲れてるんですよ、どうです？今晩は家に泊まりませんか、リーリンも合いたがってたみたいですし」

「あぁそうだな、久しぶりにデルクさんにも挨拶をしておきたいし、リーリンの飯も食べたいしな」

「はい、きっとはりきると思いますから」

いきなり変なことが起きたけどそれよりも今は久しぶりに合った親友との会話を楽しもうと、そう思ったレイフォンだった。

だがその後もガヴェットは汚染獣が現れるたびにあの状態になっていた。

汚染獣が現れたという報告を受けるよりも早くガヴェットはそれを感知し先に動いていた。

その間の記憶は本人にも無いらしくガヴェットは「覚えていない」といっている。

レイフォンにはそれが何かは分からなかったがそれ以外は変わらないので特に気には止めなかった。

次第にガヴェットの戦いぶりは有名になり女王の耳にも入った。

そしてそれから数週間後彼は天剣授受者の候補に選ばれた。

「その時天剣は既に十一人揃っていました、残すは昔僕がいた第十二の天剣であるヴォルフシュテインの座席だけでした、彼はその誘いを受け正式に天剣の候補となりました」

「ではその時フォンフォンはどんな立場に？」

フェリが疑問そうに言ってきた。

「その頃僕は天剣の候補・・・ガヴェットさんの補欠のような立場でした、もしガヴェットさんが天剣を辞退してしまった場合僕が天剣授受者に選ばれる・・そんな立場でした」

レイフォンは少し浮かない顔でそういった。

「じゃあフォンフォンが天剣授受者になったということは、彼はどうして天剣にならなかったのでしょうか？」

「・・・・あの人は天剣が授けられる前日に都市を出ました」

レイフォンはそう言うとあの日のことを思い出す。

「ガヴェットさん！！」

バスの停留所の前でレイフォンは叫んだ、その声に反応し振り向いたのはガヴェットだった。

「レイフォン・・・」

「ガヴェットさん！何故今都市を出るんですか！」

そうレイフォンはガヴェットを止めに来たのだ、明日彼は天剣授受者となる、だが彼は最後まで悩んだ挙句都市を出るという答えを導き題したのだ。

そんなレイフォンの質問にガヴェットは悲しそうな表情で言い返した。

「レイフォン、君も気づいているんだろ、俺が普通じゃないことくらい」

「ッ！」

レイフォンは雷に撃たれたような衝撃に襲われる。

「その顔だと気づいていたみたいだね、そう、俺は普通じゃないんだ、俺の身体の中には滅びた都市の電子精霊・・・廃貴族と呼ばれ

る奴等がいるんだ・・・」
「廃・・貴族？」
「そう、奴等は汚染獣によって滅ぼされた都市の電子精霊だ、彼等は武芸者に取り憑き強大な力を与える、だが憑かれた者はただ汚染獣を殺すだけの殺戮者に変化するんだ」
「そんな・・・・！」
レイフォンが驚愕の表情を浮かべる。
「本当なんだ、実際俺は汚染獣を眼にした瞬間こう思ったんだ、こいつらは殺す、何があっても・・ってな」
乾いた笑みと共に言うガヴェット。
「だから俺は何時お前たちごと汚染獣を殺すか分からないんだ、俺はお前たちがいる都市を守りたい、それをもし自分の手で壊すことになったら・・・」
「ガヴェットさん・・・・・」
「レイフォン、天剣にはお前がなれ、お前は俺と同じくらい強い、天剣にもなれるはずだ、お前がリーリンをデルクさんを孤児院の家族を、そしてこのグレンダンの民を守ってくれ・・・」
そう言い残しガヴェットはバスに乗ろうとした。
レイフォンは歩き出すガヴェットをもう一度呼び止め。
「ガヴェットさん！僕は必ず貴方よりも強くなる！そして貴方が帰ってくるまで・・この都市を守り続けてみせる！！」

レイフォンは硬く決意しガヴェットに向かって言った。

ガヴェットは笑みを浮かべバスに乗っていった。

「・・・・・・・」

都市を出て行くバスを見送り、夕日も落ちかけた所でレイフォンは孤児院に戻っていった。

第八話　思い出話　後編（後書き）

遅くなってすいません、今度の掲載は何時になるか分かりませんが、見ていただけると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6556l/

鋼殻のレギオス　幻の天剣授受者

2011年4月1日21時52分発行